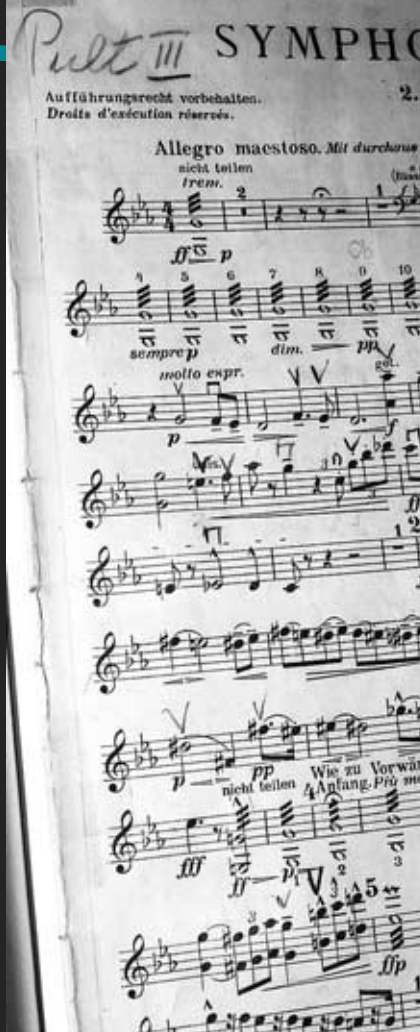




水谷瑛子（みずたに・えいこ）さん。バイオリニスト。東京芸術大学音楽部器楽科出身。昭和四十六年、「札幌交響楽団」入団、以来三十年以上に渡って第一線で活躍。白石区在住。



「クラシック音楽は敷居が高い」。そんなイメージを長年、抱き続けてきた。ロック、ジャズ、ソウルミュージック、さまざまなジャンルの音楽を聞くが、クラシックだけはどうしてもなじみずにいる。しかし、である。四月二十九日に行われる「白石区ふれあいバラコンサート（さつぽろ市民コンサート）」に札幌交響楽団がやって来ると聞いて、クラシック音楽にちよつと興味があいた。クラシックに興味の無い人でも「札幌」の名前くらいは聞いたことはあるだろう。昭和三十六年設立の道内唯一のプロのオーケストラ。楽団員八十二人を抱え、国内外で年間百回に及ぶ公演を行う日本有数の交響楽団である。その「札幌」が白石区で公演を行うのである。これを見逃す手はない。だが、素人が聞きに行つて分かるものだろうか。思い切つて区内在住の札幌交響楽団バイオリニスト、水谷瑛子（みずたに・えいこ）さんにクラシック音楽とコンサートの楽しみ方を尋ねてみた。

「クラシック音楽はどのよう

に聞けばいいのでしょうか」。生まれ初めて、音楽家と面と向かつて話することに気が付き、少し緊張しながら素直に疑問をぶつけてみた。「難しく考え過ぎよ。深く解釈しようなんて考えないでまず聞いてもらいなさい」。水谷さんは気さくにこう答えてくれた。ちよつと肩の力が抜けた。「テレビコマーシャルにもよくクラシックが使われるじゃない。きれいなメロデーだなんて思うことあるでしょう。最初はそれでいいんじゃないかな」。水谷さんの言葉にこれまでの堅苦しいイメージと違つた世界が開けそうな気がして来た。

「コンサート」はどうだろう。いろいろルールがあつて何やら難しそうな感じがする。実はクラシックコンサートの経験がない訳ではないのだ。数年前知人に誘われ、札幌コンサートホール「Kitara（キタラ）」に足を運んだことがある。ロックやジャズのそれとはどうも勝手が違い、ひたすら緊張していた記憶がある。さらに悪いことに気疲れしたのかいつの間にかうつらうつら。知人にひじて小突かれるというばつが悪い体験をした。その話を水谷さんにすると、「私も能や狂言を観に行くときは緊張するけどきつとそんな感じなんですよ